慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	サー・ヰリアム・ペチィの国富論（下）
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1917
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.11, No.11 (1917. 11) ,p.1395(1)- 1431(37)
JaLC DOI	10.14991/001.19171101-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19171101-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

早稲田大學教授　法學博士　田中穗積著

新刊發行

國民經濟概論

經濟生活は吾人人類の生活の根柢たり。吾人は之れに關し明確なる知識を有せざるべからず。今や斯學の一權威田中博士多年の蘊蓄を傾けて本書を成す。而して所論簡潔明快蓋し斯學研究者の絶好指針たるを失はず。一讀講壇上の著者に接するの感あり。

菊判總布製
全一冊
正價
金壹圓廿錢
郵稅八錢

發賣　東京牛込早稲田鶴巻一二三番　早稲田大學出版部（賣）神田東京堂日本橋至誠堂京橋北隆館（捌）京橋東海堂大阪盛文館名古屋星野書店其他

三田學會雜誌　第十一卷第十一號

論說

サー・ヰリアム・ペチイの國富論（下）

高橋誠一郎

勞働は寔に國富の父たるものなり。然れども吾人は勞働力の使用に二途あることを記憶せざる可らず。即ち一は「地方的の富」の爲めに使用せらるゝものにして、他は「一般的の富」に對するものなり。Petty は前者に由りて、愛蘭土の例に就き、現今使用せられつゝある豚檻的小屋に代る可き、溝濠を繞らし、生垣を以て圍まれ、煙筒、門戸、窓扉、華圃及び果園を有する小石壁の家屋の建築、果樹及び各土地の境界線

上に於ける用材樹の栽植、共用地の圍繞、Dublin 市の築堡、太守新殿の造營、同市に於ける船舶模型の製造、河川及び道路の改修、寺院の建設、並に各種工場の設立を意味し、後者に由りて海運及び羊毛、大麻、亞麻、生皮等諸原料の生產、並に其の精製に對するものを認めたり(The Political Anatomy of Ireland. 十四—五頁)。而して「交易窮極の大目的は富の全般に非ず、而も特に他貨物の如く消滅し得可く、變化し易きものに非ずして、如何なる時、如何なる場所に於ても富たる可き銀、金及び珠玉の豐富なるにあり。然るに葡萄酒、穀物、家禽、肉類等の豐富なるは單に今の場所及び今の時に於て富たるに過ぎず。故に斯くの如き貨物の生產及び金、銀、珠玉等を國家に供給す可き交易に從事するは何物よりも先づ有利なるものなり。然るに海員の勞働及び船舶の運賃は恒に輸出貨物の性質を有するものにして、輸入せられたる物以上に出でたる其餘剩は國內に貨幣の類を齎すものなり」と論じたり(Political Arithmetick 十八—九頁、尙ほ同書八十二頁を參照す可し)。

Petty は嘗て國民の富が過去の勞働の結果たるを明確に認識したるに拘らず(Verbum Sapienti. 九頁)今、斯く永續的財貨の生產に使用せられたる勞働に對して特殊の優越を認めたる所以のものは全く政治的見地より來るなり。彼れは常に强大なる國家を渴迎して止まざりき。吾人は是にも亦、彼れに及せる Hobbes の感化の著大なるを惟はざるを得ず。彼れが Treatise of Taxes. を繙く者は爰に國家の職能に關する彼れの思想を索むるを得可し。彼れは國家の權力に對して最も廣汎なる解釋を與へたり。國家の干涉に對しては何等の限界存することなし。敎育に於て宗敎に於て、そは普く個人の上に優越す(同書第二章參照)。臣民は之に對して全然從屬的の地位に立てり。國家が人民を遇するに賢明なる政策を以てせざる可らざるは、前者の繁榮が後者のそれに依賴するが故なり。各個人の尊む可きは、彼れ等が國家を富强ならしむ可き勞働力の一定部分を代表するが爲めなり。國家は這般の活動力を損傷せざるが爲めに周到なる注意を要す。而も、そは同時に自個に對する其の人民の勞働の利益を確保するが爲めに、之に對ひて干涉するの權能を有するなり。彼れは其の隣邦の國民に對して、飽くまで英國民の權力を强大ならしめ、而して之をあらゆる可能なる攻擊の上に超越せしめざる可らずとなせり。Verbum Sapienti. に於て課稅上に於ける錯誤の原因を算へ(第六章)關稅、人頭稅、

國內消費稅、煙突稅、地租及び動產稅に隨從せる附屬的利益を擧げ(第七章)、海陸軍及び衛戍の費用を述べ(第八章)、和蘭との戰爭に際して賦課せらる可き非常特別の負擔に對して、人心を鎭靜せしむ可き諸般の理由を提言したる彼れは(第九章)、最後に至つて人民を使用す可き方法及び其の目的を論じ(第十章)「吾人は國外より貨幣を讓受取得す可き貨物の生產に努めざる可らず、何となればそはあらゆる時に於て國內又は他の地方よりして吾人の如何なる要求をも充足せしむ可きが故なり。是、內國貨物の蓄積に依りて成就し得ざる所のものなり。內國貨物の價値は單に今の場所及び今の時に於けるに過ぎずして、一時的のものと稱せらる可きなり。然も、吾人は何時の日か、能く這般の大努力より休息し得可きぞ。答へて曰く、是、吾人が等しく算術的及び幾何的割合に於て(縱令僅少なりと雖も)、吾人の隣邦の如何なるものよりも、確然多額の貨幣を有したる時、即ち吾人が豫め彼れ等よりも以上の年月に對する準備と、而して彼れ等よりも以上の現在の貨財を有したる時なり」と主張せり(同書二十三——四頁)。彼れは恒に這個の原則をあらゆる種類の活動に適用して變ることなかりき。彼れは必ず先づ斯く〳〵の勞働が王國を富しむるものあるや否やを問へるなり。公用の爲めに貨幣を取得せんとせば、須く國內の全人民に對する食料及び必要品を少數の手に由りて生產せざる可らず、而して之を可能ならしむるが爲めには、彼れ等は從前よりも烈しく勞働するか、然らざれば技術改良の方法を講せざる可らず(是、恐らくは彼れの計畫せる有用書の要略、及び其の History of arts illiberal and mechanique. を暗示せるものなる可し)。是、實に世人が徒らに一夫多妻の制度に由りて期待する所と等しき結果を齎す可し。即ち一人にして五人の仕事を行ふを得可しとせば四人の成年勞働者を產むに等しき效果ある可ければなり(同書二十二頁)。

Petty は痛切に人口增加の必要を感じ、是を以て國家繁榮の最も確實なる章徵と看做せるも、然も、之と相並んで勞働の效程及び生產力並に天然の資源の增加を要することを認めたり。吾人は玆に愛蘭土に關する彼れが智識の影響を想はざるを得ず。斯くて彼れは時流の俗論の上に卓出して、一國にして領土少なく且つ人口大ならずとするも、其の地位、貿易及び政策に依りて、遙かに之よりも大なる人民及び領土を有するものと、其の富强の點に於て優劣なきを得可きものなりと倣せ

り(Political Arithmetick. 一頁)。彼れは一人の人が其の技術に依りて數人に等しき效果を擧げ得ると同じく、一瓠の土地も其の改良に由りて數瓠に匹敵し得ることを說けり(同書一——二頁)。彼れは特に交通業の進歩が此の目的に資すること大なる可きを信じたり。彼れは農夫、海員、兵士、工匠及び商賈を以て國家の支柱なりと稱し、あらゆる他の大なる職業を以て此れ等のものゝ虛弱及び失敗より生じたるものなりと做せりと雖も、然も海員を以て此れ等四者中の三を兼ぬるものなりと說き、「勤勉にして機敏なる、あらゆる海員は啻に航海者たるのみならず、同時に商人にして且つ兵士なり」と推賞せり。英蘭土に於ては農夫は一週四志を得るに過ぎざるに、海員は十二志の勞銀を受く(同書十七頁)。一人の海員は實に三人の農夫に相當す。和蘭は其の土地を穀物耕作及び家畜養殖に充當すること極めて少なく、家屋、船舶、機關、堤陂、波止場、遊園、珍異なる花卉及び果樹を以て之を改善し、且つ之を以て諸般の有利なる製造品の基礎たらしむるを以て、最も模範的の國家なり(同書十八頁)。彼れ等は其の手を牧牛者たる古昔族長時代の職業より脫し、而して又大部分穀物耕作の業よりも免るゝを得て、之を丁抹人及び波蘭土人に委し、以て彼れ等より犢と穀物とを取得するなり。而して「爰に吾人は商業及び精巧なる技術進歩する時は耕耘の業、減退す可く、或は又農夫の勞銀增加し、而して必然地代は下落せざる可らざるの事實を注意するを得可し」(吾人は後項に至り、地代及び勞銀を論ずるに及びて再び之を說くことある可し)。若し現今一日八片內外を得るに過ぎざる英蘭土農民の全部が悉く工匠と爲りて、一日十六片(二志乃至二志六片を給與せらるゝの常なるを以て、是決して大なる勞銀にあらず)を收受するに至らば著大なる利益と謂はざる可らず。斯くて穀物と家畜とは、宛も和蘭に對するが如く、仍ほ農業の狀態を變ぜざる外國より輸入せらるゝを得可しと主張せり(同書三十二——四頁)。

以上の所論に據りて明かなるが如く、Petty も亦 Raleigh, Mun, Child 及び Temple 等と同じく、和蘭に對して嘆美的羨望を感じたる者の一人なり (Wilhelm Roscher 著 Die Geschichte der Nationalökonomik in Deutchland. 一千八百七十四年版二百二十七頁を比較せよ)。一千六百六十四年彼れは Collection of the Frugalities of Holland. を草したるのみならず(此の書は海上に於て失はれたり)、和蘭に於て實施せられつゝある種々なる

制度文物を自國に採用せんことを反復勸告せり。今其の一例を擧ぐれば Treatise of Taxes. 第九頁(茲に見れたる同國の登記制度及び金融機關誘入の議の如きはあらゆる和蘭模倣者の間に共通なりしものなり、一千八百五十七年版 Abhandlungen der K. Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaft. 第三卷中に合卷せられたる Roscher 著 Geschichte des englischen Volkswirthschaftslehre im 16. und 17. Jahrhundert. 六十三頁參照)第七十五頁並に Political Arithmetick 第二十頁より、恰も曩に引用せる三十二頁に至る所言の如き是なり。然れども同書第十六頁の所說に徵して稽ふるに、彼れは當時の和蘭に對する估料が多少誇張せられつゝありしを觀じたるものゝ如く、而して英國民が當に其の研究を怠る可らざる所のものは和蘭よりも、寧ろ佛蘭西なる可しとの信念は顯然として彼れの上に生育し來りしなり。(John Kells Ingram 著 A history of political economy. 一千八百九十三年版四十二頁參照)。一千六百六十二年の彼れが Treatise of Taxes. に在りては、和蘭の制度は英國の模倣す可き典範として看做されたり。此の書中に於て彼れが擧示したる唯一の佛國稅制は鹽稅にして、それさへ彼れが是認せざりし所のものなり(同書五十四頁及び六十三頁)。一千六百七十六年の Political Arithmetick. に於て和蘭は猶ほ第一位を占むると雖も、然も、そは單に佛蘭西に對して實現せらる可き英國の優越を主張す可き主たる論旨を假託するの口實に供せられたるのみ。一千六百八十七年の Five Essays in Political Arithmetick, viz. I. Objections from the City of *Rey* in *Persia*, and from Monsr *Auzout*, against two former Essays, answered, and that *London* hath as many People as *Paris*, *Rome* and *Rouen* put together. II. A Comparison between *London* and *Paris* in 14 particulars, III. Proofs that at *London*, within its 134 Parishes named in the Bills of Mortality, there live about 696 thousand People. IV. An estimate of the People in *London*, *Paris*, *Amsterdam*, *Venice*, *Rome*, *Dublin*, *Bristoll* and *Rouen*, with several observations upon the same. V. Concerning *Holland* and the rest of the VII *United Provinces*. (本書は各對立の頁に英佛兩文を以て記述せられたるものにして、佛譯は題して Cinq essays sur L'Arithmetique Politique. と云ふ。Thomas Birch の History of the Royal Society. 第四卷、一千七百五十七年版、五百十三、十六並に同十七頁に據るに Petty は同協會の一千六百八十六年十二月二十二日の開會に際して、曩に揭げたる其の著 Two Essays. に對する反對論に關し、辨妄一篇を草し、更に同月二十九日、倫敦及び巴里の大さに關する二手錄を

交付し、其の去るに臨みて、之を出版す可きを依頼せり。即ち同年十一月及び十二月の同協會哲學議事錄――第十六卷、第百八十五號、二百三十七頁以下――所載の A further Assertion of the Propositions concerning the Magnitude, &c. of London, contained in two Essays in Political Arithmetick; mentioned in Philos. Transact. Numb. 183; together with a Vindication of the said Essays from the Objections of some Learned Persons of the French Nation, by Sr. W. Petty, Knt. R. S. S. 是なり。本書の第一に印刷せられたるものは大體に於て此の第一手錄と同一にして、第二手錄は第四論の論旨と異る所なきなり。次で翌年一月五日の開會に際し、更に Adrien Auzout の批難に答へたる三論稿を草したるなり）に至りては低陸聯邦は公然第二位に貶黜せられたり（就中、其の第五論、四十二――五十一頁、同國の人口に關する所論を參照す可し）。而して斯くの如き國際的比較を行ふに際し、Petty は國民的富が多少國庫の收入と異るものあり（Political Arithmetick. 八十八――九頁の所言の如き是なり）、而して國家に對し獨立の地位のものたるを會得せり。然れども彼れは全然其の議論の發出したる官房學的意見より自己を分離すること能はざりき。而して常に土地、貨物及び人民の劃然たる財政上の地位を特に重要視して變らざりしなり（Hull 編 Economic Writings of Sir W. Petty. 緒言 lxxiii.）。

斯くて彼れは其の統計的研究の結果に倚りて、英國の盛運は今や傾けりと慨歎しつゝある當時の俗論に對し强硬に反對の意見を表明したり。（英國の產業は Charles 二世の御宇に於て衰頽しつゝありとの思想に關しては前掲 Roscher 著 Geschichte des englischen Volkswirthschaftslehre. 七十四頁參照）。Josiah Child が A new Discourse of Trade. の序文（前掲第四版 XX 以下）中に掲げたる露西亞貿易以下衰頽せる同國貿易の長き目錄は明に當時の輿論を反映するものにして（本書の出版は頗る遲れたるも、其の成れるは一千六百六十九年以前なる可し）、而して Sam. Fortrey が Englands Interest and Improvement.（殊に英國は佛蘭西との貿易に由りて少くとも一ヶ年百六十萬磅を損失しつゝあるを主張するの點に於て、前掲版二十五頁）、Roger Coke の數著（就中、其の A Treatise Wherein is demonstrated, That the church and state Of England are in equal danger With the trade Of it: Treatise I. Reasons of the increase of the Dutch Trade. Wherein is demonstrated from What Causes the Dutch Govern and Manage Trade better than the English; whereby they have so far improved their Trade above the English: Treatise II. 一千六百七十一年版、に

於て。Petty が Political Arithmetick. の序文第三項末に於て云々せるは當に本書を指すなり)及び匿名氏の Britannia Languens, or a Discourse of Trade: shewing The Grounds and Reasons of the Increase and Decay of Land-Rents, National Wealth and Strength. With Application to the late and present State and Condition of *England, France,* and the *United Provinces.* の如きは洵に之を代表せるものと稱するを得可し。然るに Petty は其の Political Arithmetick. に於て、密に英國の覇業を主張し、Charles 二世にして若し自ら決意するあらば、路易十四世の餌より免るゝを得可きの意を暗に寓せり。「本論の主張にして佛蘭西の意を害するなかりしならんには、そは已に久しき以前に世に現れて、其教義を奉ずる者と、而して恐らくは人類の利益に向つて既に諸般の改革とを見出したるなる可し」云々と其の子 Charles が國王に宛てたる本書献本の辭に謂へるの言は、正に此の著の性質を物語るものと稱す可し。Petty は彼れが採つて以て本書の表題とせる「政治算術」なる文字の發明者なるが如し(Palgrave 編 Dictionary of Political Economy. 第一卷五十六頁所載 Stephan Bauer の History of Political Arithmetic. 參照)。彼れは一千六百七十二年十二月十七日 Dublin より Lord Anglesea に書を寄せて、當時の消息を語り、彼れが目下何等の私情、私心なく不偏不黨、獨り「久遠の法則と眞理の規矩とに從て」Political Arithmetick. 及び Political Anatomy of Ireland. の著に從事しつゝあるを述べたるは實に吾人に傳存せる「政治算術」なる文字の嚆矢なり。後、一千六百七十四年倫敦に於て出版せられたる、彼れが Discourse made before the Royal Society the 26th of November 1674, Concening the use of duplicate proportions in sundry important particulars. の Newcastle's 公 William に寄せたる献本の書翰に於て、數學の研究は其の理論の運用せらる可き多樣多種なる事物、已知件、及び現象あるを知らざる可らず「何となれば是等のものを有せざる線や數は琵琶又は彈手を有せざる琵琶絃の如くなればなり。蓋し、閣下よ、此の世に於て尚ほ更に攻修せらる可き政治的算術及び幾何學的正義なるものゝ存するありて、其の誤謬及び缺點は機智も辯術も又は特殊の關係も之を掩飾する以上のことを爲す能はず、決して之を癒治するものにあらざるなり」云々と說きて彼れが新科學に對する計畫の一端を披瀝せり。然れども彼れが斯くの如く「長く企圖したる政治算術の一雛形」と稱したる(Political Arithmetick. 序文)、此の書の脫稿せられたる正確なる年月は今より之を推知するに由なし。前揭 Collection of Sir William

Petty's Works since the year 1636. には一千六百七十一年附を以て記され、牛津大學圖書館所藏 Rawlinson 寫本集中に存する Petty 自身の校正を加へたる本書の手寫本は同じく七十一年附なるを以て、Fitzmaurice は同年中に成れるものと謂ひ (Life of Sir William Petty. 百八十五頁、彼れは本著の題號を Discourse on Political Arthmetick. と記せり)、Sir Peter Pett は之を「一千六百七十一——二年に於ける手錄の論說」と呼べり (The happy future state of England. 一千六百八十八年版、百〇六頁)。然れども Petty が尙ほ一千六百七十二年の末月に於て本書の述作に從事しつゝありしことは前揭の書牘に據りて明かなる可く、加之、書中の證左に基きて其の完成が一千六百七十六年前に非ざるを推知し得可し (Hull 二百三十五——六頁)。本書は早くよりして其の友人の間に寫本に由りて流布し、今日に傳存するものも亦少なからず。就中、興味大なるものは Petty 自ら訂正を加へて Southwell に贈り、一千八百三十四年、Thomas Thorpe の購入する所と爲り、更に Dr. Neligan の所有を經て、大英博物館の所藏する所と爲れるものなり。彼れは Charles 二世に寄せたる献本の辭を草し、其の手寫本一部を國王に捧呈し、併て之を出版せんとするの意ありしも、遂に其の事なくして終れり。一千六百八十三年を以て出版せられたる The fourth part of the Present State of England. に附せられたる Englands Guide to Industry, or Improvement of Trade, for the good of all People in General. Written by a Person of Quality. なるものは固より彼れの承諾なくして現れたる本著の無責任なる版本なり。一千六百九十年版は著者の死後、其の未亡人の意思に由りて出版せられたるものなり(彼の女が Southwell に送りたる一千六百八十八年二月十八日の手簡)。此の書は更に一千六百九十一年並に一千七百五十一年に出版せられ、尙ほ一千七百七十八年、Scarce Tracts on Trade and Commerce serving as a Supplement to Davenant's Works. の第二卷に、一千八百八十三年、An English Garner Ingatherings from our history and literature. の第四卷中に印刷せられたり。吾人が曾て「ペチイの貨幣論」中に揭げたる此の書版本の副題は古寫本に存せざる所のものなり(三田學會雜誌第十一卷第七號所載)。

和蘭の「富」と對比す可きものは愛蘭土の「貧」なり。其の住宅は內に牛酷乾酷なく、亞麻絲、織絲、毛絲なき十六萬の汚穢なる小舍より成ると稱せらる (Political Anatomy of Ireland. 七十九頁)。然も同國は決して天然に於て不利なる地位に立つものにあ

らず。宛も和蘭が三大河口に地位を占むると、其の土地平坦にして風車の利用に適するとに由りて商工業に對する自然の利益を有するが如く（Political Arithmetick. 二百五十六頁）、然して又倫敦が Thames 河畔の最も便宜なる位置を占むるに因りて、永く英國内に於ける最大都市たるを得可きが如く（Treatise of Taxes. 二十四頁）愛蘭土は其の各地點何れも海に近く、且つ日々隆盛を來しつゝある新大陸との貿易に對し形勝なる地位を占めたり（Political Anatomy. 七十九頁）。同國の發達を見ざる所以は天惠の薄きが爲めにあらずして、其の人民の所要品少なきが故に、交易の用意なきに坐するものなり。彼れ等は煙草を除きては毫も外國品を欲求することなし。内國商業の存せざる所には勞働に對する刺戟あることなし。愛蘭土の最大不幸は其の人民の營みつゝある日常生活の單純なるにあり。彼れ等をして更に多くを消費せしめ、從つて又更に多くを贏得せしめんとせば彼れ等の間に奢侈の風習を生せしむるを可とす。そは癈て九十五萬の庶民が光彩、機巧及び勤勉を增加して國家の大富裕を來さしむるに至る可しと主張せり（同書八十三頁）。

Petty は素より Sir Dudley North の如く徹底せる自由貿易論者に非ず（一千六百九十一年版、Discourses upon Trade, principally directed to the Cases of the Interest, Coynage, Clipping, Increase of Money. 參照。本著主張の大綱は最も善く之を「貿易上に於ては全世界は單に一國民若しくは一人民に過ぎず、而して此の點に於て各國民はそれ〴〵宛も各個人の如し」云々以下の章句に見れたる其の序文に由りて親知するを得可し。vii 頁以下）。無制限なる貿易の利益を認識す可く餘りに當時のマーカンチリスト流の思想に感染する所大なりしなり。之が爲めに、彼れは時々自由貿易の問題の論議を回避し（例へば直白的に航海條例を說くことなかりしが如き）、而して既に吾人の謂へるが如く、金銀財寶が富のあらゆる他の形態よりも望ましきものなることを主張し、貿易の差額及び之が檢束の政策を云々する點に於て全然一般マーカンチリストの口吻と異なるなきを惟はしむるものあるなり。遮莫、彼れの所論が大體に於て交易自由の政策に傾けるも亦、否む可らざる事實なり。彼れは Treatise of Taxes に於て、貿易に對して自然に反する施設を行はんとするの非なるを說き、人爲的の手段に託りて輸出入を檢束し、若しくは貴金屬の輸入を增加せんと試むるよりは、却つて一國に對する輸出入の高を共に增加するに由りて國富は增加す可

きものなりと論じ、和蘭の工業にして果して英國のそれに勝るあらば、彼れ等の精選せられたる職人を誘致し、若しくは吾が最も技巧に富める者を彼の地に派して之を學ばしむるを以て得策と爲すにあらずや、而して若し和蘭に於けるよりも此の地に於て遙に低廉なる食料を得可しとせば、當に煩瑣無價値にして且つ陳套なる課稅及び官術を撤廢す可きなり、こは水をして自ら其の自然の水源以上に昇らしめんことを說くよりも勝れるものあることを認むと主張し（同書四十一頁）、更に Political Anatomy に於て、何が故に吾人は吾人自身の勞働及び國土が生產すること能はざる外國商品の使用を禁止せざるを得ざるや、吾人は是に由りて節約し得たる人と土とを以て是等の貨物及び其の他の物をも購入し得可き輸出貨物の產出に使用し得るに非ずやと論じたり（同書八十三頁）。尙ほ彼れが鑄貨及び地金の輸出に對するあらゆる拘束に反對したるは吾人が既に詳密に論述せる所なり（前揭「ペチイの貨幣論」參照）。

Petty が人口に關する所論は仍ほ彼れが過渡時代の論客たることを示すものなり。國土の豐饒なるは大なる人口を維持することを得せしむ。一千の蒼生を給養し得る一千瓠の土地は是以上の效果を有せざる一萬瓠の土地よりも望ましきものなり。而して是、和蘭が佛蘭西に勝る所以なり。前者に在りては後者に比して宗敎、行政、司法、防備、警察等諸般の費用少なきを得可し（Political Arithmetick. 十一頁）。彼れは又國土の天然の相違を正確精密なる文字を以て表明し得可しと信じたり。彼れは愛蘭土の例に就きて比較氣象學的の研究に加へて、種々なる土地の自然的利益は農事の經驗に依りて數學的に積算せらる可きものなりと提言せり（Political Anatomy. 第八章、Of the Cœlum and Solum of Ireland. 四十八—五十八頁參讀）。然れども彼れは大人口を有する國家は其の稀少なるものに比して遙に富裕なるものなりとの見地よりして、英國をして更に其の人口を夥多ならしめ、斯くて其の勞働力を增加せしむるが爲めに諸般の方策を立つるに於て豐贍なるものなり。彼れは New-England の植民地に於て有爲なる體格の英國民が多數農耕の業に從事して貴重なる勞力を徒費しつゝあるを歎じ（Pol. Arithmetick 九十頁）「新英蘭土」の人民を「舊英蘭土」及び愛蘭土に移植す可きを主張し（同書九十四頁）、尙ほ英蘭土及び蘇格蘭の低陸は全英、蘇、愛の人民を給養するに足るものありとの見地よりして愛蘭土及び

蘇格蘭高陸の人民をして英蘭土に移住せしむ可きを提議せり(同書六十五頁以下參照)。彼れが人口の稠密を希望するの念は、旋て又、一國の上に及す大都市の利益に論入せしむるに至れり。彼れが Another Essay in Political Arithmetick, Concerning the Growth of the City of London; with the Measures, Periods, Causes, and Consequences thereof. (本書は恐らく一千六百八十一年の交、愛蘭土に於て起稿せられたるものなる可きも、翌年六月 Petty が倫敦に歸れる後、初めて出版せられたるものなり。此の一千六百八十三年附初版刊行の後、三年にして An essay Concerning the Multiplication of Mankind; Together with another essay in Political Arithmetick, Concerning the Growth of City of London; with the Measures, Periods, Causes, and Consequences thereof. なる書出づ。是前書の訂正增補第二版が改題して現れたるものなり。後、本書の第二版は一千六百九十九年、Several essays in Political Arithmetick. の卷頭に編入せられ、第一版は一千七百五十九年の A collection of the yearly bills of mortality, from 1657 to 1758 inclusive. に添加せらる。本書は其の Another Essay. と稱する以上、是より前に同一問題を取扱へる他の論文存すること明かなるも、不幸にして早く逸して傳らず。此の點に關しては第二版に增補せられたる The Stationer To the Reader. 及び The Extract of a Letter concerning the Scope of an Essay intended to precede Another Essay concerning the Growth of the City of (London), &c. 並に Fitzmaurice の Life. 二百十六頁を參照す可し)は最も明確に此の點に關する彼れの思想を親知せしむるものあるなり。一千五百弧以下の面積の上に立てる(第二版は二千五百弧と記せり)現在の倫敦市が其の七倍に膨脹するに至らば、之が住民は生活の必要品を獲得するに一層困難を感ずるとなきやと謂ふに、彼れは然く思惟することなく、穀物、野菜、果實、乾草、及び材木は都より半徑三十五哩以内に位する周圍の土地よりして今と同じく敏速に供給せらる可く、而して斯くの如き都市は其の住民の散在せる場合に比して、(第一)國防の費用少なく(第二)内部の謀反及び不軌より生ずる危險を蒙ること稀に、(第三)宗教の劃一を保つ可く、(第四)司法事務は迅速と自在とを以て處理せられ、(第五)租税は其の賦課の公平と徴收の容易とを得、併て其の額を增加す可く、(第六)外國貿易に關しては、鉛、石炭、船賃等に由り英國の利得する所は同一なりとするも、然も、工藝品に由つて利する所は大となる可し。何となれば彼れ等は其の製作の量に於て優り、質に於て勝れたるものある可ければなり。

即ち大都市に於ては各個の製作は出來得る限り多くの部分に分れ、是に因りて各工匠の仕事は單純且つ輕易と爲るを以てなり（彼れは爰に時計製造に於ける分勞の例を擧示せり、同書一千六百八十三年版三十七頁。彼れは又 Pol. Arithmetick. に於て、分業の行はるゝ範圍が市場の廣狹に由りて制限せらるゝを暗示し、人口稀少なる場所に居住する者は自ら其の兵士、僧侶、醫師及び辯護士たらざる可らず、而して恰も遠洋の航海を行ひつゝある船舶の如く、其の家内に諸般の準備を蓄へざる可らずと説き、同書十二頁、更に織物の例を引きて分勞の利益を主張せり、同書十九頁）。加之是等工藝品は其の船積みせらるる可き場所に於て製造せるゝとせば、之が輸送費を輕減す可く、而して、（第七）悅樂及び裝飾の諸技術は競爭者の多數なるに因りて最も能く進歩せしめ得可く、（第八）あらゆる事業家、あらゆる工匠が互に接近して生活するに由りて運搬及び旅行の勞苦を減殺し、（第九）乞食及び偸盜を防止するの點に於ては兩者の間に相異を見るとなしとするも、然も、（第十）有用なる學問の普及並に進歩を可能ならしめ、（第十一）出産に由る人口の增加は兩者の間に大なる相異なく、唯だ（第十二）惡疫の災害に至りては大都市に取りて、特に大なるの虞あるも、然もそは克く他の利益に依りて、償はるゝを得可しと説けり（同書三十一―四十三頁）。一千六百六十五年倫敦に猖獗を極めたる惡病の慘害を親しく知れる Petty は決して其の研究を怠ることなかりき。彼れに Of Lessening ye Plagues of London.（一千六百六十七年十月七日附）の方策あるのみならず（Fitzmaurice 百二十一―二頁）、其の諸書に於て屢々之に關説せり（Verbum Sapienti. 八―九頁其他）。而して過去二十ケ年間に於ける疾病は全人口の約八十分の一を拉し去れりと計算せり（Another Essay. 十五頁）。

彼れの計算に據れば人口は幾何級數の割合を以て增加す可き傾向を有するも、其の倍加の期間は世界の年齡、既存の人口及び其の他の事情に因りて異なるものと思惟せり。而して彼れは英國に於ける人口增加の割合を以て緩急兩端の中庸を得たるものと認めたり。今、Noah の「箱船より出でたる八人が毎十年間に累進的の倍加に由りて增加するものと想像せば、洪水以後の最初の百ケ年には八人より八千人に膨脹す可く、而して洪水後の三百五十年（凡そ Noah 死去の時代）には一百萬と爲り、更に方今一千六百八十二年には三億二千萬（合理的推測に據りて現今

世界に存するものと思惟せらるゝ所)と爲る可し」(Another Essay. 十九—二十頁)。「若し人民が三百六十年間に倍加せらるゝものとせば、或る博識なる人々によりて今、世界の表面に存するものと積算せられたる現在の三億二千萬は將來の二千年以内に地球上住居し得可き土地の各二瓰に對し、一人の割合にまで增加す可し。而して其の時こそ、聖書の預言するが如く、戰爭及び大屠殺等を免るゝこと能はざる可し」(同書十六—七頁)と說けり。玆にPettyの所謂「或る博識なる人々」とは果して何人を指せるものなりや、不明なり。一千六百八十五年Isaac Vossiusは其のIsaaci Vossii variarum observationum liber. に於て世界の人口を五億萬と思料したるも(同書六十八頁)P. Bayleは同年Nouvelles de la République des Lettre. に於て、此の積算は餘りに過大なるものなりとて之を嗤笑せり(一千七百二十七年版 Oeuvres. 第一卷 二百十二—四頁)。C. E. Stangelandは其の著Pre-Malthusian Doctrines of Population, a study in the history of economic theory. (一千九百〇四年版)に於て以上Pettyが人口論に關する所說を引用し、之を以て一千六百八十二年のAn Essay concerning the Increase of Mankind. より得たる旨を註すると雖(同書百四十六頁)、而も其の表題と出版年代との一致を缺けること吾人が既述の所言に照して瞭然たるものある可し。

國家の安固は其の富に依賴し、富は又生產的勞働に依賴するが故に、國家の政策は其の臣民をして最大なる利益に向つて彼れ等の活力を發動せしむるを目的として指導せられざる可らず。賢明なる國家に取りて第一の義務たるものは自己の狀態を諒知するに存す。於是乎、統計の必要起るなり。彼れは實に英國に於ける新哲學の創始者がThe novum organum. の精神に從つて行動せる實驗的研究者の一團中最も熱心なる一員なりき。「世界の精密なる知識」のみ獨り能く發明に對する確乎たる基礎を供し、斯くて又「人間の支配」に導くを得るものなり。是、實に「知は力なり」と謂へる格言に對するSpinozaよりも、寧ろBacon流の解釋なり。是實にNovum Organum. がDe interpretatione naturæ sive de regno hominis を論じたる所以なり。Pettyは他くまでも正確なる知識を求めて止まざるものなり。Thomas Birch其のHistory of Royal Society. 中に記して曰く、曾て「より著しく大なり」との言を用ひたる者あるに際し、Sir William Petty. は數量若しくは度の孰れをも徵示することなき言語を用ふ可らざることを忠告せりと(同書第四卷、百九十三頁)。蓋し這般の訓誡はPettyに及せ

るBaconの感化を指示するの一助たる可きものなり。

斯くて彼れはあらゆる無益の勞作を阻止せんとせり。教育制度は國家的支配の下に置かる可きものなり。而して其の一切の目的は人間の活力と技巧とを發達せしむるに存せざる可らず。無益なる問題の攻究を旨とせる教育は單なる空想的生涯の準備たるに過ぎざるものにして從つて其の弊害は啻に無用たるのみに止らざるなり。教育の國家的支配は適材を選拔して適宜の教育を施すを以て、父母、知友等の愛着より生ずる無定見の弊害を排除す。「鴉は自己の幼鳥を以て常に最も美しきものと信ず」(Treatise of Taxes. 三頁)。諸般の高等なる職業に志す者の數は是等の職業に對する必要を減殺するに由りて、之を制限せざる可らず(同書九頁)。而して一國に取りて必要なる僧侶、醫師及び法曹(シヴィリアンス)の數を知るは敢て難事にあらざる可し(同書十頁)。其の勞働は何物をも生産することなきが故に、之が所得は恰も賭博者のそれと異なるなき人々の階級を減少せしむるが爲めに、法律制度は其の總ての部局に於て之を簡易たらしめざる可らず(Pol. Anatomy.八十八頁)。刑罰法の原則は變革せらる可きものなり。國家は其の人員を殺し、傷け、若しくは禁錮するに由りて、自己を懲罰しつゝあるものなることを記憶せざる可らず。勞働及び社會の富を增加す可き罰金及び定役を以て之に代へざる可らず(Treatise. 四十九頁)。國家の宗教政策は信教の自由を標榜せざる可らず。彼れは異教と貿易とが並進するを證明する幾多の例證を援用せり。彼れは和蘭が「勞働と勤勉とは神に對する自己の義務なることを信ずる」非國教徒に對して本國の迫害を免る可き避難所を提供し、斯くて又、其の富を增加し得たるを推賞せり(Pol. Arithmetick.二十三頁)。然れば、租稅制度の全般は、又生産業を鼓舞するを主眼とせざる可らず。稅金の徵收より生ずる貨幣の缺乏に對しては愼重なる注意を商工業階級に向つて拂はざる可らず。他方に於て不生産的の階級は最大なる負擔を課せらる可きものなり。彼れ等の資産は之が所有者を變ずるに由りてのみ獨り生産的のものと爲り得可きなり。富と財産とは地主及び怠惰なる者より移して、快巧にして勤勉なる者に歸せしめざる可らず(Treatise. 十七—九頁、並にPol. Arithmetick. 三十八頁)。國家は乞丐及び遊民に對して仕事を授く可し。而して是れ等無職の徒を使用するに由りて、(一)國民の間に不足せる事業、(二)勞働多くして、技術少なき事業、及び(三)國家の

新企業は系統的に遂行せらるゝを得可し(同書十二頁)。彼れ等の勞作は不生產的のものと觀らるゝことある可きも、然も尙ほ罪惡は多く懶惰より來るを以て、國家の安穩を脅す、犯罪階級に對する費用を輕減するを得可し。彼れは「何人と雖も恰好の勞働が、より優れたる渡世の道を與ふるに拘らず、僅なき活計の爲めに彼れが生命、手足若しくは自由を賭するは、自然に反するものあればなり」と稱して、爰に Sir. Thomas Moor (More) が Utopia. の第一編を參照す可きを敎へたり(Another Essay. 四十頁)。彼れは又、黽勉の風習は縱令、一時の失費を忍びても、之を維持するを得策とするを主張せり(Treatise 四十一頁)。若し或る工業にして、暫く利潤なきに至るも、之を停止す可らず。是に使用せられたる者は事業の休止に伴へる懈怠に因りて勞働に對する彼れ等の適性を失ふことある可ければなり。彼れは Edward Chamberlayne が Angliae notitia or the present state of England. を引用して六才より十六才までの少年が年々其の消費する所以上に一千二百磅を收得しつゝある Norwich の例を賞揚し、幼年勞働を國內の他地方にも誘入す可きことを提言せり(Pol. Arithmetick. 百〇六頁。但し Angliae notitia. は「六才より十才まで」と記せり。一千六百七十二年版、百五十―一頁參照)。由是觀之、勞働は當に國家繁榮の礎たるものなり。遮莫、Petty は斯くの如き人間活動の形態が更に是よりも高き物に向つて次第に變移す可き黃金時代の到來を吾人に確信せしむるを忘れざりき。此の幸福なる時代に於て人は初めて此の世界に於ける其の自然の目的、即ち知性の諸力の修養に從事するを得るなり。(Verbum Sapienti. 二十四頁。Wilson Lloyd Bevan 著、Sir William Petty, A Study in English Economic Literature. 一千八百九十四年版、五十八―九頁參照)。

勞働は單に價値を創造するのみならず、又以て之が尺度たるものなり。Petty の勞働價値說は蓋し Hobbes により暗示せられたる所なる可きか(Hobbes の著 De Cive 第二十四章參照、一千八百四十一年版、Opera philosophica, studio Gulielmi Molesworth. 第三卷、百八十五頁)。所得は實に Petty が國富算定の出發點たるものなれば、彼れは明確に表面に現れたる勞働の結果にあらざる所得を說明するの必要を感じたり。此の種の所得に關して當然發生す可き根本の問題は無限の期間を通じて、年々一定の支拂を受く可き權利が、何故單に市場に於て一定の額を收得するに過ぎざるやにあり。こは地代に適用せられて年賦購入の年限の問題と爲る。彼れは屢々此

の通語を使用し、且つ其の問題を論ぜざるにあらざるも（Treatise. 二十六—七頁）、然もそは彼れが主たる目的の外に立てるものにして、彼れは之を細論することなくして過ぎたり。彼れは土地の價値が之より生ず可き地代に依賴す可きを認め、（素より實質に於て他と異なるなき一定土地の所有に附隨せる或る特殊の體面、快感又は特權に從つて變化ある可きも）、斯くて彼れが國富及び之が發達の研究に於ける一要素として、其の地代の資本價値を決定するよりも、寧ろ特殊の土地が必ず一定の地代を有する所以を闡明するに努めたり。

Pettyは先づ其のTreatise of Taxes. に於て、「地代の神秘なる本質」を說明せんとせり（同書二十四—六頁）。土地の自然的地代は勞働者の食料及び必需品を控除せる收穫の結果なり。而して之が貨幣價値は穀物地の耕作者と等しき期間勞作せる一坑夫が其の取得せる銀の一部を以て自己の費用を支拂ひたる後、尙ほ殘し得可き銀の高に由りて量定せらる可し。「即ち一百の人々が十個年間、穀物の耕作に從事し、而して同數の人々が同期間、銀の採掘に從事するものとせば、即ち、銀の純收益は穀物の全純收益の代價なり」（同書二十五頁）。這般の思想は更にPolitical Anatomy of Ireland.に至つて彫琢せられたり。曰く「二瓠の牧草地が圍繞せられ、其の內に乳離れしたる犢が放たれたりと假定せよ、而して十二ヶ月の間に之が食用肉の重量を一百斤增加す可しとせば、五十日の食料と推定せられたる、此の種の肉の百斤及び犢の價値の利子は土地の價値若しくは一ヶ年間の地代なり。然れども若し一人の勞働が一ヶ年間に同一土地をして同一種若しくは或る他種の六十日以上の食料を生せしむるを得ば、即ち其の一日の食料の餘分は人間の勞銀なり。兩者は共に一日の食料の數に由りて表明せらるゝなり。或る人々は他に比して食ふ所大なる可きも、そは茲に顧慮するを要せず。蓋し、吾人は一日の食料を以て、あらゆる種類及び大さの者一百人が生き、働き、而して產むが爲めに食す可きものゝ百分の一と解すればなり。而して或る種の一日の食料は他種のものよりも之を生產するにより多くの勞働を要することある可きも、是、亦顧みるに足らず、即ち吾人は世界のそれ〴〵の國々に於て、最も容易に取得せらるゝ食料と解すればなり」と（同書六十四頁）。又曰く「銀の一オンスはPeruに於ては一日の食料に等しきも、然も、そは露西亞に在りては、之をPeruより露國に運搬す可き費用及び危險に基きて四日間の食料

に相當す可し」と說けり(六十五頁)。次で彼れは巧に這般の理論を技術と單純なる勞働との間に於ける等價及び方程式、並に技術と之に對する社會の意向(繪畫に對する需要と供給)との間の方程式に適用し、更に之を賤しき勞働と好意、親知、趣味、交友、雄辯、名譽、勢力、權威との間の方程式をも構成し得可しと做せり(六十六―七頁)。

彼れは未だ收益漸減の法則を會得するに至らず。否、寧ろ、彼れが Political Arithmetick. に於て、一瓠の土地も其の改良に由りて數瓠に匹敵し得るに至る可きを說けるに由りて稽ふるに、土地の沃度は際限なく有利に增加し得可きを信じたるものゝ如し(同書一―二頁)。然も彼れは各瓠に對する地代の高は地上の食料に依賴する人口の密度に由りて決定せらる可きを主張し、「若し英國內に生活する者が一人に過ぎずとせば、即ち全領土の恩澤は其の一人の生計の資たるを得るに過ぎず、然るに若し他の一人を加ふる時は、同一領土の地代、即ち恩澤は二倍と爲る可く、二人を加へなば、三倍と爲る可し。斯くの如くして、旋て、全領土が食料を供給し得る限りに於て、多數の人々が之に移植せらるゝに至るなり。即ち若し人が或る土地の價値を知る可しとせば、實際にして且つ自然なる問題は、そが幾千の人間を養ふ可きかに存せざる可らず」と說けり(同書六十七頁)。

以上は是 Petty の所謂土地の內部的價値なるものなり(Treatise 五十頁)。然らば其の外部的價値は如何。彼れが爰に使用せる內部價値及び外部價値なる文字の意義は大英博物館が Sloane 寫本集中に所藏する Dr. Abraham Hill の手寫に係る無題の對話篇中に於て最も明確に之を窺ふを得可し。曰く「吾人は先づ金剛石の高直又は低廉なるは二個の原因に基くことを注意す可し、一は鑛石其の物の內に存する內部的のものにして、他は次の如き理由に因る外部的にして且つ偶發的のものなり」と。而して彼れは後者を動して金剛石の價値を騰貴せしむる場合を數へて(一)其の產國に於ける採取の禁止せらるゝ場合、(二)印度に於て其の資本を拋下す可き、更に有利なる貨物存するが故に、商人が之を輸入せざる場合、(三)戰亂に對する恐怖に由りて亡命配流の人々に取り生活の資たる可く買占めらるゝ場合、及び(四)多數の士女が美裝するを要する大王侯の婚儀近ける場合を擧げたり。斯くて是等諸原因中の或る者が世界の一部に於て强大なる時、そは轟て全般に影響す可し。即ち全世界に於ける大寶石商は互に相知り、相通じ、而して著名なる金剛石の多くに對

しては乘合と爲り、且つ之が賣買に際しては大なる共謀及び密計を用ゆるが故に、若し金剛石の價格が波斯に於て、著しく騰貴する時は、そは亦英國に於ても歴然上騰するなる可し云々と說けり。扨て土地の外部價値は其の內部價値よりも之を積算すること遙に困難なり。是、課稅に際して實際に生ず可き問題なり。大體に於て土地の外的價値は三ケ年間に於ける（若しくは土地の上に生ずるあらゆる偶發的の事項の回轉す可き期間に於ける）、總ての契約の平均を求むるに由りて之を得可し。然も需要供給に變動を生ぜしむる諸般の原因に就きては分析的に之を考察せざる可らずと做せり（Treatise. 三十一頁）。彼れは愛蘭土の地代が英國に於けるよりも低き理由を解說して、（一）叛亂、（二）法律上の權利の不確定、（三）人民の寡少（四）財產の大部分が在外者によりて所有せらるゝこと、及び（五）司法制度の不備なるに在りと論じたり（同書二十七—八頁）。

彼れは又地代を以て土地の位置に歸せり。「若し倫敦又は一軍隊を給養する穀物が四十哩の彼方より齎さる可きものとせば、倫敦の一哩以內、上記軍隊の陣營內に生ずる穀物は其の自然價格に對して、之を三十九哩の間、運搬するの費用に相當する高を加ふ可く、而して鮮肉、果實等腐敗し易き貨物に關しては腐敗其の他の危險に對する保險料を加ふ可く、尙ほ最後に彼の地に在りて（例へば旅宿に在りて）是れ等のものを食する者に對しては家賃、家具、陪侍、料理人の技術及び之に陪從する其の勞働等、總ての瑣末なる用意をも加へざる可らず」。尙ほ又、人口稠密なる場所に近き土地の地代は遠隔の地に比し、同所に土地を有するの快樂及び名譽に由りて增加す可し（Treatise. 三十頁）。要之、各國に於ける地代は其の人民の政治的、自然的及び宗敎的意見に從つて異る所ある可きなり（同書三十二頁）。商工業の發達は地代を下降せしむ可し（Pol. Arithmetick. 三十四頁）。然れども斯くの如きは單に一時の現象に過ぎず。即ち都市に居住する人民の貨物消費高增加す可きが故に、穀物に對する需要の增加は其の價格を增加せしめ、延いて地代をも騰貴せしむ可し（同書七十三頁）。

第二種の所得たる利子に關する Petty の意見は、吾人曾て「ペチイの貨幣論（下）」中に於て論じたるを以て、再び玆に之を贅せず。

彼れは既述の如く、地代を說明するに當り、勞銀に關說して人が其の勞働により

て生せしめたる土地の自發的生產力の增加より來るものにして、又之に等しきものなりと謂へり(Pol. Anatomy. 六十四頁)。而して彼れは勞働の單位たる各個人の價値を愛蘭土人に對し、奴隷の平均價格たる十五磅(成年二十五磅、幼年五磅)に依つて表示したることなきにあらざるも(同書二十一頁)、英國民に對しては更に正確なる算定法を用ひたり。曰く「英國の人民は其の數六百萬にして、彼れ等の費用は一人七磅として四千二百萬なりと想定し、而して又地代は八百萬、全動產の利得は更に八百萬なりとせば、人民の勞働は殘餘の二千六百萬を供給せざる可らず、之に二十を乘ずる時は(人類の全體は土地と等しく二十ヶ年賦購入に價するを以て)全人民の價値は五億二千萬と爲る可し、此の數を六百萬を以て除する時は男、女、及び兒童の各個を評價す可き八十磅餘を得可く、而して成年に對しては其の二倍を算し得可し」と(同書三十二頁。是を以て吾人が前に揭げたる Verbum Sapienti. の推算と對比せば多少の相異あるを發見す可し。同書七頁以下參照)。而して彼れは偶々勞銀と地代とが反對に高低す可きを注意し、勞働賃銀が收益に對して有する割合を增加せば、地代は必然減少せざるを得ざるを例示せり(Pol. Arithmetick. 三十四頁)。彼れは又「勞働の價格を確定せしめざる可らず」と稱して、勞銀の法定を稱讃し、這の法制を遵奉せず、又は之をして時代の推移に順應せしめざるは國民の產業を進步せしむ可き總ての努力に對して有害なるものなりと做せり(Treatise 三十三―四頁)。

畢竟ずるに彼れが興味は勞働者の總數の上に在りて、其の各個の差違に存せず、近代的意義に於ける分配の問題は遂に彼れの研究に上らずして終れり。如何に彼れと Ricardo との類似を說くに努むる者と雖も(Bevan 九十八頁參照)、此の點に於て彼れ等兩者の間に存する重大なる相違を看過すること能はざる可し。Petty は如何にして國家を富强ならしむ可きやの問題を提げて立ち、Ricardo は純然たる個人主義的見地よりして冷然當時の經濟的現象を分析せり。寔に分配の問題は未だ Petty の時代に於て發生する所あらざりしなり。（大正六年十月十四日夜）